

或る農業研究員の 放浪記 (12)

さすらいの研究員

第12話 昭和百年、谷田部・観音台の先史4 —小野川用水の功績—

昨年(2025)の12月のメールマガジンに掲載された放浪記(第9話)では、昨年を「昭和100年」としていましたが、満100年としては今年、令和8年が「昭和100年」にあたり国内各所で関連したイベントが開催されています。昭和生まれの私としては、まさに“昭和は遠くなり”にけり“を実感しているところです。さて、今回は、昭和初期に建設された農業用水「小野川用水」を取り上げます。小野川用水(図1)は、干ばつに弱かった地域の農業と人々の暮らしの安定に大きく貢献した農業用水で、茨城県により昭和11年着工、昭和13年に完成しました。それは、水源を安定した霞ヶ浦に求め、ポンプを使って約25m標高が高い台地上の田んぼに水を届けるという当時の画期的なプロジェクトでした。

第12話では、つくば・谷田部地区における水田農業が宿命的に直面した干ばつとそれを克服するために繰り広げられた闘いの歴史に接近したいと思います。

今回も少し長くなってしまったので2回に分けてお届けしたいと思います。

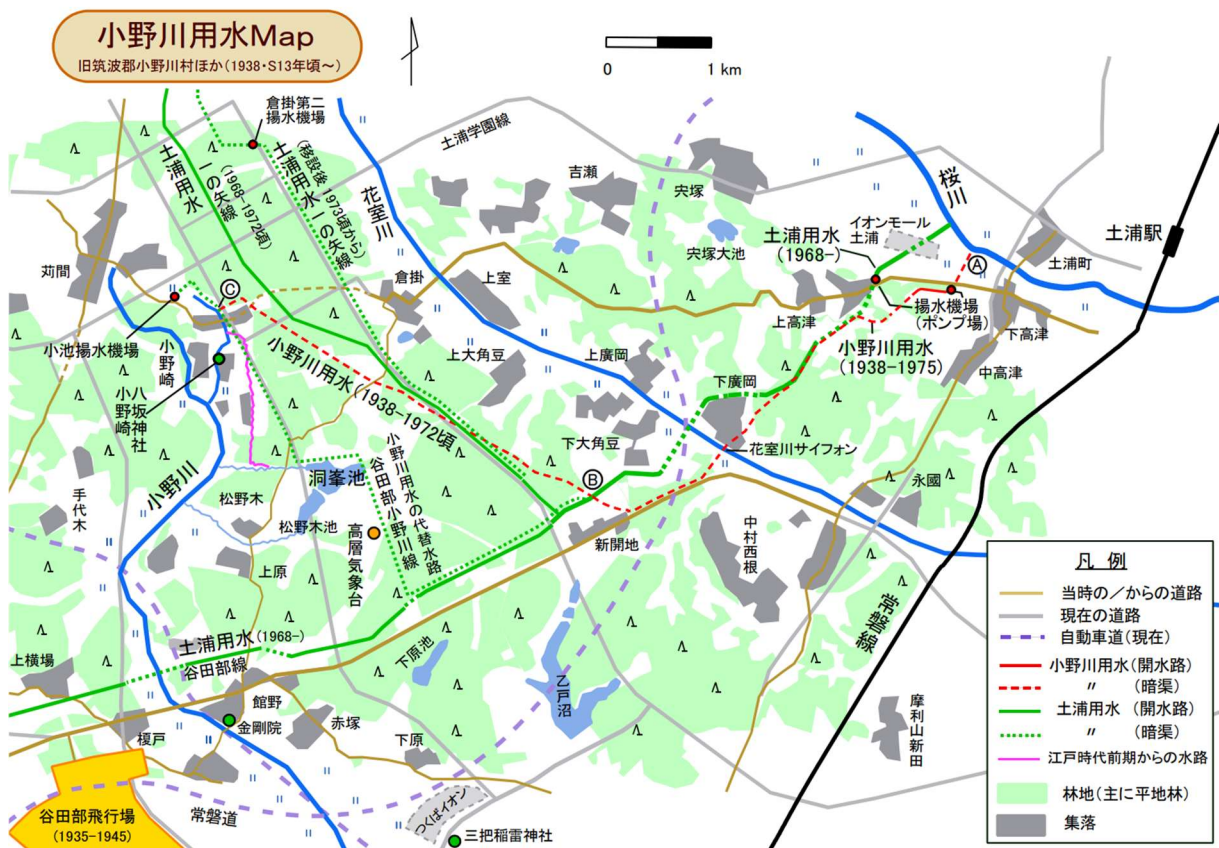


図1 小野川用水と土浦用水

貧しかった常総台地の農村とその要因

小野川用水を紹介するにあたって、まずは背景として、つくば・谷田部地域が置かれていた状況について、簡単に触れたいと思います。

江戸時代の中期以降の筑波地方を含む関東地方では、人口減少に直面するなど厳しい状況にありました。それは大雨による洪水、そして干ばつや冷害に起因する度重なる飢饉によるもので、なかでも筑波周辺の雨量は少なく、干ばつに弱い台地の谷津田ではコメの生産が不安定で厳しい生活を余儀なくされていました。そのため、農村では子供を奉公に出したり、子殺し（間引き）による口減らしが行われました。明治以降では間引きが禁止されたものの、人身売買を含めた口減らしは昭和初期まで続いていたのです。

干ばつに見舞われることが多かった筑波地方では、昔から雨乞いが盛んに行われました。その中心となった神は稲岡雷神と金村雷神です（谷田部の歴史編さん委員会,1975）。稲岡雷神の三把稲雷（さんばいねいかずち）神社（つくば市稲岡）は1384年（文中元年）もしくは1385年の創建と伝わっていて、雨乞いと農作物の神として付近の農民の信仰を集めました。金村雷神の金村別雷（かなむらわけいかづち）神社（つくば市上郷（かみごう））は931年（承平元年）の創建と伝わり関東三雷神のひとつとされています。また、小野川流域内にある館野集落の金剛院観音寺では、かつて村人が毎月17日に集まり護摩を焚く雨乞い祈念が行われていました。この地域では古くから干ばつに苦しめられていたことがわかります。

つくば・谷田部の一帯が特に干ばつに晒されやすかったのは、台地に水利用ができる大河川がなく、雨量も少ないという条件のほかに地形が関係しています。茨城県の南部や千葉県の西北部には標高20～40m程度の台地、いわゆる常総台地が広がっています。台地には大きな河川がありません。常総台地の地形は、主に最終間氷期（12～13万年前）に古東京湾の浅海環境で形成されたため比較的平坦な台地面を有していて、続けて訪れた氷期の海面低下に伴う侵食で浅い谷が刻まれています。そして台地上の谷津田では、地形の高低差が小さく湧水が限られていました。この地域の田んぼはいわゆる天水田で、直接の降雨の外に、浅い谷の上流部にある池の限られた溜め水に依存していました。そのため、谷田部周辺の水田農業は干ばつに弱く不安定で、農家は厳しい生活を強いられていたのです。小野川流域の上流に位置し、現在の学園都市内の洞峰公園にある洞峰（峯）池（どうほういけ）は地域の重要な水源池のひとつでした（図2）。洞峰池は徳川時代初期、天然池に人工を加えて造成せられたものと伝わっています（大池回生の石碑（後述）、横田栄一谷田部町長）。



図2 現在の洞峰池

江戸時代の試み「尊徳の馬鹿堀」

江戸時代の後期、この地を治めていた谷田部の細川藩は、1834年（天保五年）頃より財政難を克服するため藩医・中村勸農衛（かのえ）を通じて二宮尊徳の報徳仕法に取り組みました。尊徳の仕法とは、江戸時代末期に荒廃した農村を再建するために確立された道徳と経済を一体化させた独自の改革手法のことです。

さて、その頃のこと、干ばつが続いた谷田部城下では農政家として名高い二宮尊徳に指導を仰ぐことにしたそうです。城下を見廻った尊徳は、洞峯池から小野崎村の水田へ、水を引くための用水堀をつくるよう指示しました。この工事には、多くの村人が狩り出されて用水堀が完成したのですが、重大な問題が発覚しました。なんと、水が流れなかったのです。測量の間違いか、地盤に問題があったのかわかりませんが... それ以来、出来た堀は「尊徳の馬鹿堀」と呼ばれ、その跡は近年まで残っていたそうです（茨城県県民生活環境部生活文化課）。以上のように、いにしえより常総台地の農村では、農業用水の確保が死活的に重要な課題だったのです。

洞峯池の改修工事

干ばつに悩まされてきた小野川流域では、昭和に入って本格的な対策が行われます。まずは1928年（昭和3年）から1932年（昭和7年）にかけて、流域の水田の主要な水源池のひとつであった洞峯池の改修が行われました。当時の洞峯池は2つの池から構成されていましたが、上流側の池を深く掘って貯水能力を高め用水源の強化を図ることにしました。また、揚水機や水門を整備するとともに、池の一部を埋め立てて新田開発を行うもので県の耕地整理法の適用を受けた取り組みでした。

高層気象台の初代台長 大石和三郎氏は、当時の洞峯池の様子を次のように記しています（大石、1950）。

「昭和の初年頃までは高層気象台の境界は実に直接にこの上池（洞峯池）に接して居たのである。・・・中略・・・、しかるに昭和3年頃からこの上池に耕地整理法を施し、池の半部を浚渫して貯水を完からしめ東半部を水田となし、なお池の南部にも畑ができたので気象台の構内は直接に池と接することはなくなった。しかして昔は蘆荻*（ろてき）茂る風流な天然の池沼も今は全く幾何学的で四角の人工溜池となったのである。」と記しています。

*蘆荻（ろてき）：水辺に群生するイネ科の植物、アシ（蘆）とオギ（荻）の総称

この事業のいきさつは洞峰池のほとりに建っている「耕地整理記念碑」に格調高い文章として記録されていて当時の池の姿や人々の様子が想像できます。

耕地整理記念碑

筑波郡小野川村洞沼自古小野崎溜池為所利用其起原雖不詳徴之元祿裁許図載中提灌堀馬鹿堀而中堤灌堀現存馬鹿堀今猶存址然則其用己在萬治宝延之頃歟方天保仕法藩廳督工大加修理爾來雖有施工未能得完也而上下兩池每異其利害屢於中堤起紛爭昭和二年村宰幹旋茲遂滿協定以得確立親睦之基焉於是屬於上池者因依耕地整理法改修以便灌溉除旱魃之患首依倚藤沢氏更得鄰鄉有力家諸氏援助幸得組成組合凡全地区三十六町歩組合員五十六名昭和三年春起工改築中提設余水吐又擴鑿導水口新設揚水機水閘及暗渠尋相議企池底浚渫與開田業初劃地面五町有余歩浚堀約四尺以使貯水常量達于一萬三千立方坪許擬之干昔時旱魃甚之歲幾可無其患而残余地拓之贏得田六町有余與耕作道及水路若干昭和七年一月竣功此工運土用鉄軌排水具卿筒等概皆用現時利器要役夫員無慮數千人算工費二萬五千余而各員協心戮力始終

一貫膺事甫得收有終之美焉顧昨嘆眇乎瀦溜者今變爲漫々碧水遭旱魃驚龜裂者今則爲蛙鳴喧噪境徒委荆
棘蘆荻者今化爲穰々美田焉嗚呼此業興利多不啻鄉闔福祉亦實足增國利進公益其功其績洵以可傳後昆
矣小野川村認其績經村會決議以金若干補助之頃者小野崎有志胥謀欲建碑于池畔以記念之徵文于余余感
其興利之功大即記之銘白

池水漫々 波峯長安 維沃維濕 豐登洽歡

昭和七年七月 茨城縣知事從四位勳四等 阿部嘉七 題額
桂文 張替清治 撰
竹軒 古矢 節 書
逆井龜年 刻

漢文の読解は敷居が高いので現代文に直します。

耕地整理記念碑（現代文訳、生成 AI を利用、著者が修正・追記）

筑波郡小野川村の洞沼（ほらぬま）にある「小野崎溜池」は古くから利用されてきたが、その起源は詳しく分かっていない。元禄年間（1688～1704）の裁許図（当時の公的な地図）には「中堤」、「灌堀」、「馬鹿堀」*などが記されており、現在も「中堤」と「灌堀」は残っており、「馬鹿堀」もその跡が残っている。したがって、溜池の利用は万治（1658-1661）や宝永（1704-1711）の頃にはすでに始まっていたのであろう。

その後、天保の改革の時代（1841-1843）には藩庁が工事を監督して大規模な修理を加えた。以来、たびたび工事は行われたものの、完全な整備には至らなかった。また、上池と下池では利害が異なり、「中堤」をめぐるしばしば争いが起こっていた。

昭和 2 年、当時の村長が仲裁に入り、ついに双方の協定が成立し、親睦の基礎が築かれた。そこで上池側の人々は、耕地整理法に基づいて池を改修し、灌漑を便利にして干ばつの被害を減らそうと考えた。まず藤澤氏**に頼り、さらに近隣の有力者たちの援助を得て、幸いにも組合を結成することができた。対象となる地区は約 36 町歩（36 ha）、組合員は 56 名であった。

昭和 3 年春に着工し、中堤を改築して余水吐を設置し、導水口を広げ、新たに揚水機や水門、暗渠を設置した。さらに協議のうえ池底の浚渫と新田開発も計画した。

当初、池の面積は 5 町歩（5 ha）余りであったが約 4 尺（約 1.2 m）掘り下げた。これにより常時の貯水量は約 1 万 3 千立方坪（7 万 8 千 m³）に達した。その結果、昔のように干ばつが激しい年でも、ほとんど被害を受けなくなった。また、残った土地を開墾して 6 町歩（6 ha）余りの田地を得たほか、農道や水路も整備した。

昭和 7 年 1 月に工事は完成した。この工事では、土砂の運搬に鉄軌道（トロッコ）を用い、排水装置や排水管などもほとんど当時の最新機械を使用した。必要となった人夫は数千人にのぼり、工費は 2 万 5 千円余りであった。しかし組合員たちは心をついに力尽くし、終始変わらぬ努力を続けた結果、ついに立派な完成を見ることができた。

振り返れば、かつて浅く水がたまるだけであった場所は、今では広々とした青い水面となった。干ばつたびに地割れに苦しんでいた土地は、今では蛙の鳴き声がにぎやかな地となった。また、ただ雑草や芦が生い茂る荒地であった場所は、豊かな美田へと姿を変えた。

ああ、この事業がもたらした利益は極めて大きく、一村の幸福にとどまらず、国家の利益と公共の福祉をも増進するものである。その功績は、まことに後世へ伝えるべきものである。

小野川村ではその功績を認め、村会の決議によっていくばくかの補助金を贈った。またこのたび、小野崎の有志たちが相談し、池のほとりに碑を建てて記念碑を建てたいとして、私に碑文の作成を依頼した。私はこの事業がもたらした功績の大きさに感銘を受け、ここにその由来を記し、銘を添える。

池の水は満々と広がり、波立つ水面はどこまでも穏やかである
土は肥え潤い、豊かな実りに人々は喜びあう

昭和 7 年 7 月

茨城県知事・從四位勳四等 阿部嘉七 題額

桂文 張替清治（板橋（つくばみらい市）の開業医で茨城県県議員）

撰文 竹軒 古矢節 書 逆井龜年 刻字

* 「馬鹿堀」は先述のとおり天保5年（1834）頃以降に建設されたので元禄年間（1688-1704）にはまだなかったものと考えられます。

**藤澤氏：藤澤三郎氏（当時栄村村会議員、第3代つくば市長藤澤順一氏の祖父）

この石碑の近くに関連する石碑がもうひとつあります。「大池回生」です（図3）。これには、研究学園都市の建設にあたって、昭和46年6月に耕地整理組合を解散し、洞峯池を日本住宅公団（当時）に提供し洞峯沼公園（原文ママ）として生まれ変わることと協力することとともに、「農民と共に生きた大池の精霊に感謝する」と刻まれています。



図3 洞峰公園に立つ「大池回生」の碑

小野川用水の建設

洞峯池の改良、整備は昭和7年に完成したものの、その年の秋は豪雨に見舞われ小野川や東西の谷田川が氾濫するという大洪水が発生しました。取り入れ寸前の晩成の稲の5割が流され農村では大混乱になりました（谷田部の歴史編さん委員会，1975）。さらに、昭和8年、9年と続けて大干ばつに見舞われます。茨城県土地改良事業60年誌には、この「干ばつは本地域の50%に干害を与え、植え付け不能あるいは枯死により繭価（けんか）の暴落と共に不況は深刻となり農村経済は破産寸前となった」と記されています。

このことを受けて抜本的な水源確保策として計画されたのが「小野川用水」です。小野川用水事業は、水面標高が1m前後で涸れることがない水源池・霞ヶ浦の水を約25m標高が高い台地上にポンプアップして農業用水として利用しようという大胆かつ画期的な農業水利事業として計画されました。

図1の赤の実線ないしは点線が当初建設された小野川用水の路線です。これをみて意外に思う方も少なくないのではないかと思います。私も農業水利の研究者の観点から、この水路の線形をみると、初見では路線選定に無理があるように感じました。なぜなら、台地の下流側（南側）から上流側（北側）に向けて水を流そうとしているからです。しかし、思ったより台地は平坦です。標高25mまでポンプアップされた桜川の水を緩勾配で台地上を流下させて洞峯池に落とす計画でした。図1もしくは図4をみると、末端部は洞峯池ではなく小野川支流の上流部や補助ポンプ場に接続されるようになっていますが、どの段階でこのように変更されたのかはわかりません。幹線暗渠の勾配は1/7,000、これは、水路100m当たりの高低差が僅か1.4cmということです。以前紹介したイスタンブールのローマ水道（放浪記第7話）もびっくりの超々緩勾配です。この緩い勾配の水路に必要な水量を流すためには断面の大きな水路を必要としました。そのため、幹線暗渠には内径1.15m、サイフォンには内径0.70~1.15mのコンクリート管（フューム管）が用いられています。

通常、フューム管は、鉄筋が縦横に入っていて外圧や内圧に耐える鉄筋コンクリート管です。しかし、事業が行われた昭和10年代は物資不足の時代でした。鉄筋が不足していたので、鉄の代わりに竹を用いた竹筋フューム管が用いられたという記録が残っています。この

竹筋ヒューム管の製造は、土浦市にあり現在も盛業中の中川ヒューム管工業（株）が担当しましたが、工場で製造して現場に運搬することが強度的にできなかったのが現場打ちで造られたそうです。もし現物が残っていたら令和の博物館でみる事が出来たかもしれません。

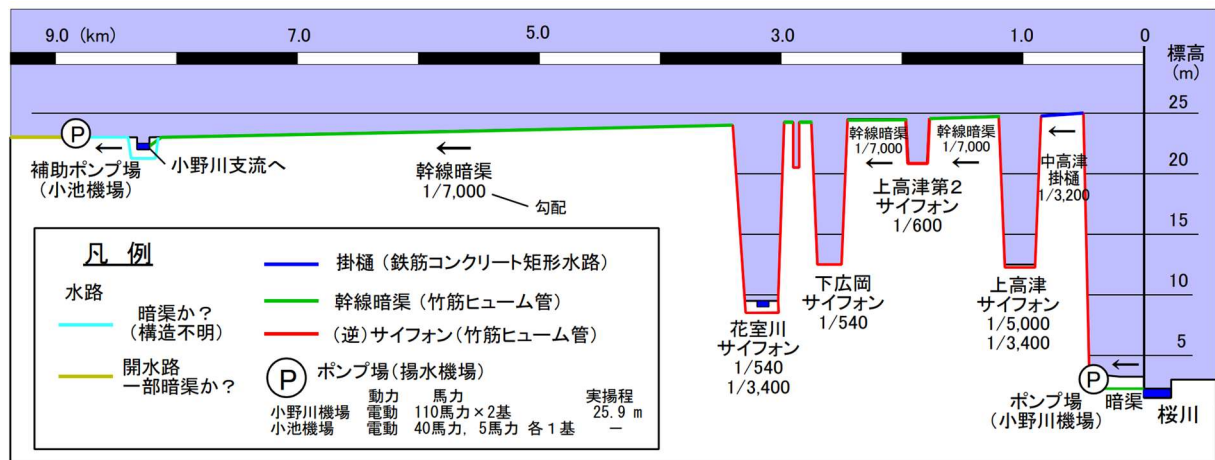


図4 小野川用水の縦断面図

水路の縦断面（図4）をみると途中の谷は（逆）サイフォンを使って越えました。特に谷が深い花室川サイフォンでは少なくとも15m前後の高い水圧がかかります。竹筋フューム管で水漏れが無いように施工し管理していく必要があります。特に管の接続部には細心の注意が払われたものと考えられます。このように高度な技術が求められたのです。これを計画し設計・施工した当時の茨城県の技術者には脱帽ものです。

なお、幹線暗渠の勾配は1/7,000と緩勾配でしたが、サイフォン部の勾配は1/540～1/5,000と勾配をやや大きく設定しています（図4）。これは、サイフォン部の流速を早くすることで、土砂の堆積を防ぐ工夫のひとつでした。また、サイフォンの低部には泥抜きが設けられていたようです。

しかし、当初はこの斬新な事業への反対の声は少なくありませんでした。新しい水路の建設には多額の経費が必要です。この県営事業では、総予算18万円のうち半額9万円を国、残りの半分4.5万円を茨城県で負担し、残った25%（4.5万円）は地元の負担になります。そのため金銭的負担への懸念から反対者が多かったのです。ただし、当時は現金が無くとも、工事に必要となる土工への労力提供（図5）や必要部材の提供を支払いの代わりにすることができました。なお、農業水利事業においても国と県、ならびに受益者を含む地元で費用を分担するしくみは、今日まで基本的に受け継がれています。

また、そもそも霞ヶ浦の水を台地の上まで運んでくるのが本当にできるのか？という疑問を持つ人も多かったそうです。さらには、同じ小野川流域の農家でも少し下流の農家では、事業が行われた場合、上流に入ってきた水は自然と下流に流れてくるので、あえて多額の費用負担をしなくても水量は増えるはずだと考える人もいました。特に「下流域の中小の地主の方々が反対の中心」（藤澤,1990）だったそうです。ここで洞峯池の改良事業で奔走した藤澤三郎氏は、「後世のことを考え今多少出費しても、小野川用水の抜本対策はどうしてもやらなければならないと考えて用水事業の積極的な推進派」（藤澤,1990）となって反対派を説得し、丸二年かけて同意を取り付けて建設が決まったのです。



図5 勤労奉仕による小野川用水の建設

元の写真は谷田部の歴史編さん委員会(1975)より. 生成 AI(chatGPT)でカラー化

表 1 茨城県における動力ポンプを活用したかんがい排水の展開

年代	ポンプ技術	かんがい排水への導入事例
明治年間 (1868-1912)	日本における初期の動力ポンプの導入 茨城県では 1903 年 (M36)以降に導入が進む	1885 年(M18) 静岡県庵原郡飯田村でかんがい用として動力ポンプ (蒸気エンジン+遠心ポンプ) が用いられる。
		1907 年(M40) ひたちなか市三反田においてかんがい用に使用される (蒸気エンジン+遠心ポンプ), 受益 45 ha 1907 年(M40) 稲敷郡河内町大徳鍋子新田において排水用に使用される (蒸気エンジン+遠心ポンプ), 受益 194 ha
大正年間 (1912-1926)	石油発動機と遠心ポンプの組合せ ディーゼルポンプ	1919 年(T9) 猿島郡境町長井戸沼耕地整理組合において排水および一部用水に使用される (電動機)。受益 1,100 ha 1922 年(T11) 水戸市千波湖普通水利組合において用水に使用される (電動機), 受益 970 ha
昭和 (戦前・战中) (1926-1945)	揚程の大きなポンプの導入が進み台地上の水田へのかんがい事業が増える	1924-31 年(T13-S6) 八俣幸島地区 (現 古河市) で高台の天水田にかんがいを行う事業, ディーゼルポンプ, 受益 140 ha, 揚程 13 m 1936-38 年(S11-13) 小野川村外二ヶ村 (小野川用水): 受益 557 ha, 揚程 25 m 1942-48 年(S17-23) 吉沼村外六ヶ村 (現 つくば市西部): 受益 1,019 ha (畑を含む), 揚程 16 m
昭和 (戦後) 以降 (1945-)	規模の大きなかんがい事業へポンプ利用が進む	1946-1962 年(S21-37) 出島地区 (現 土浦市, かすみがうら市): 受益 670 ha, 実揚程 32 m 1946-1962 年(S21-37) 那珂中部地区 (現 那珂市, 水戸市): 受益 815 ha, 実揚程 44 m 1952-1968 年(S27-43) 土浦市外十五ヶ町村 (土浦用水) (現 土浦市, つくば市, 牛久市, つくばみらい市)。受益 (当初) 4,172 ha, 揚程 29 m 1979-2017 年(S54-H29) 霞ヶ浦用水 (土浦市ほか 12 市町): 受益 19,294 ha, 上水道と工業用水を含む

参考資料: 茨城県土地改良事業団体連合会 (1962), 牧 (1958)

ここで、小野川用水事業の要はポンプで水を台地の上に安定して揚水する技術です。25 m という高揚程ポンプ (水を持ち上げる高さが高いポンプ) を用いて水資源が乏しい台地上に送り込むことはいつ頃から可能になったのでしょうか? 表 1 は茨城県における動力ポンプのかんがい排水への導入事例を示しています。日本における動力ポンプを用いたかんがい排水は 1885 年 (明治 18 年) 頃が最初だったようです。茨城県では、1903 年 (明治 36 年) に古河市悪戸新田、1904 年 (明治 37 年) に河内町源清田などで排水対策に用いられた事例が早いようで、いずれも蒸気エンジンを動力としていました。用水への使用事例では、

1907年（明治40年）のひたちなか市三反田や河内町大徳鍋子新田の事例がみられます。これらは早期の導入でしたが、いずれも低い揚程での利用だったようです。

その後、昭和の初期になるとポンプの利用が広がります。そのような中で小野川用水が計画されるのですが、これは高揚程ポンプを活用して台地上の不安定な水事情を解消しようとする先駆的な取り組みの事例のひとつと位置付けることができます。このあと、戦後の食糧難の時代を迎えると、出島地区や那珂中部地区など県内の他地区においても台地上への規模の大きなかんがい事業が実施されていきます。この流れは1952年（昭和27年）に建設が始まる4,000 ha以上を対象とする土浦市外十五ヶ町村用水（以下、土浦用水）や1979年（昭和54年）に着手され受益地が19,000 haを超える霞ヶ浦用水へと展開していくのです。

小野川用水の功績とその後

小野川用水によりその受益地では、いにしえより悩まされ続けてきた干ばつの被害を受けることがなくなりました。これはこの地域の暮らしに歴史上一線を画す出来事だったといっても過言ではありません。用水の完成により受益地では、「反当たりの収量が以前の四俵（240 kg/10a）から2倍近くに増え、以前は米が穫れなかった最上流部の小野崎あたりでも陸稲の収穫がぐんと増えた」（藤澤,1990）と記されています。

そして、小野川用水の効果は小野川の水田だけに留まりませんでした。1947年（昭和22年）、この地域は再び深刻な干ばつに見舞われます。小野川用水の水利組合では、自己の水田灌水を中止し、土浦市内の百余町歩（100 ha余）にわたる水田に分水し土浦の水田は蘇生します。これにより土浦市議会では感謝決議を行い小野川村と水利組合に対して感謝状を贈っています。このように水利事業の効果は、流域の受益者はもとより周辺の地域にも知れ渡っていったのです。おそらくこのようなことの積み重ねが、後日周辺で展開される土浦用水や霞ヶ浦用水などの規模の大きな事業を実施する上で、農家の理解を得る助けになったものと思われまます。

しかし、小野川用水の整備事業には欠落していた点がありました。それは排水改良です。当時の小野川用水事業における排水計画では、「本地区は中央を貫流する小野川が排水を司るが雨水に際しては田面を掩うこともある。しかし、それは急速に減水し被害は僅少であるから計画をしない」という趣旨のことが書かれています。これは排水工事を計画に入れると予算の増加を招き、事業の採択や同意を得ることが難しくなることへの配慮だったのかもしれない。

結果的に小野川流域の排水改良は、1972年（昭和47年）着工の県営かんがい排水事業により実施されました。最上流部の小野崎にある小野崎八坂神社では関連する圃場整備事業の



図6 排水改良を含む圃場整備の完工記念碑
（小野崎八坂神社）

完成を記念する石碑をみることができます（図6）。

小野川用水はその後、水路沿線の開発や施設の老朽化、将来的な施設の維持管理の負担等が考慮されて、1975年（昭和50年）に後発の土浦用水（図1の緑の実線と点線）に統合されることとなります。また、下流側（図1のB-C間）については、研究学園の整備地区内となったため、図1のA-B間に先駆けて土浦用水の支線のひとつである谷田部小野川線として作り替えられました。

小野川用水が通ったみち

それでは、地域生活の安定に大きく貢献した小野川用水はどこを通っていて、どのような姿をしていたのでしょうか？ 驚くべきことに、過去に国土地理院が発行してきた歴代の地図を見ても、水路がどこをどう通ってきたのか全体像が分かる記録は見当たりません。正確には、水路の一部区間については記載されています。具体的には、一部の地形図に下流側（図1のB-C間）の水路は記入されています。しかし、上流側（図1のA-B間）については地形図への記載は見つかりません。さらには、令和の現在、小野川用水の姿はもとより、その遺構を見つけることさえ困難になっています。小野川用水の姿は、全く幻のようなのです。

それでは、小野川用水がどこを通っていたかを知るにはどうしたらよいのでしょうか。参考資料として、ひとつには、建設時の計画平面図（つくば市谷田部郷土資料館、もしくは谷田部の歴史編さん委員会、1975）と、もうひとつには国土地理院が提供している古い空中写真が参考になります。例えば、昭和20年代の米軍撮影の古い空中写真には、揚水機場の近くの開水路部分や浅く埋設された部分などを中心に明瞭な軌跡が記録されています（図7）。



図7 空中写真にみる小野川用水（上流部）

国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスを利用、USA-R458-No1-29(1947/11/3 撮影)の一部を加工

A地点（図1）で桜川から取水された水は、現在の下高津小学校の崖下にあった揚水機場で台地上に約25mポンプアップされ、コンクリート製の掛樋（図8）を通じて西側に回り込みます。そして現在の6号線バイパス（土浦バイパス）のあたりをサイフォンで抜けて、上高津新町を通過、後発の土浦用水と平行して流下しました。その後、天川団地西で土浦用水から分かれ、現在の桜ニュータウン、下広岡の集落内を通過して花室川サイフォンに至ります。サイフォンを抜けたあとは、常磐自動車道の桜土浦IC内を通過、国道354号（通称：野田線）としばらく平行して西進します。その後、進路を北西に変えて、並木、産総研の敷地、宇宙センター、東新井などを通過して小野川上流の支流に注ぎました。そして一部は小池揚水機場に繋がりポンプアップされ、さらに下流で利用されました。現在では、上流側の多くは新興住宅地の下に埋もれ、下流側では学園都市に上書きされたことで、ほとんどの区間で小野川用水の痕跡は残されていないのです。

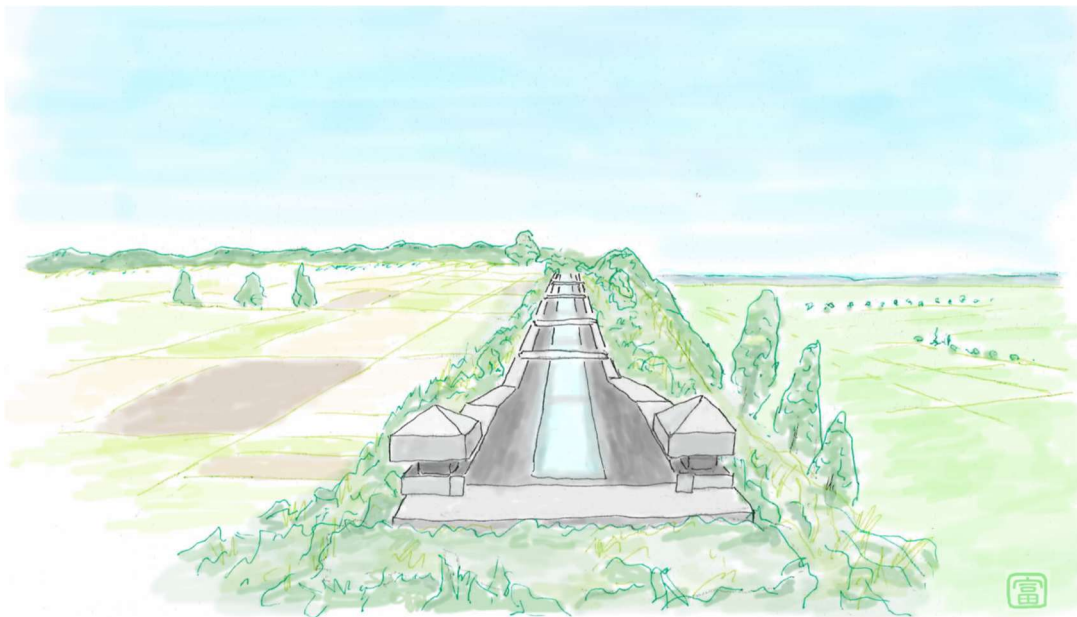


図8 在りし日の小野川用水

水路（鉄筋コンクリート製掛樋）の左側は現在、下高津小学校の敷地、右側は桜川の沖積低地。水路の角に取り付けられた四角錐状の装飾（？）が特徴的です。参考資料：茨城県土地改良事業60年誌

今回は、小野川用水の当時の姿を偲びつつ、現代の小野川用水である土浦用水が流れるつくば・谷田部の地を散策したいと思います。

参考・引用資料

- 安部奎輔(1994) 藤澤勘兵衛と土浦用水
茨城県県民生活環境部生活文化課, 「尊徳の馬鹿堀」, 茨城の民話 Web アーカイブ
<https://www.bunkajoho.pref.ibaraki.jp/minwa/> (2026/5 閲覧).
- 茨城県土地改良事業団体連合会(1962) 茨城県土地改良事業60年誌
- 大石和三郎(1950) 長峰回顧録, 長峰回顧録集(高層気象台彙報 特別号付録), p68-69
- 谷田部の歴史編さん委員会(1975) 谷田部の歴史 104-108
- 藤澤勘兵衛(1990) 勘翁自伝: 八十五歳のうは言, 勘翁自伝刊行委員会
- 牧隆泰(1958) 日本水利施設進展の研究, 土木雑誌社

*前々回(第10話)でインドの旅1と題して掲載していましたが、続きはまたそのうちにということで容赦ください。